

## 文献紹介

林 博通著『大津京跡の研究』

思文閣出版 2001年3月

B5版 243頁 本体8,800円

長年、大津京跡の調査に関わってこられた林博通氏が、これまでの研究を集大成して、一書をまとめられた。著者は、これまでも大津京について、『さざなみの都大津京』（サンブライツ出版、1978年）や『大津京』（ニュー・サイエンス社、1984年）を出版されているが、旧著が概説的、啓蒙的な著書であったのに対し、新著は、より専門的な内容となっており、文字通り現時点での大津京に関する研究書の決定版と言えよう。なお、本書は、2000年度に國學院大学へ提出された学位論文に、若干の補訂を加えたものである。

初めに、本書の章立てを掲げる。

第1章 文献資料にみる大津京

第2章 大津京研究史

第3章 推定大津京城における発掘調査

第4章 大津宮の復原

第5章 大津京の構造

第6章 まとめと今後の展望

付章 南滋賀廃寺にかかる軒丸瓦製作技法

まず、第1章では、大津京の性格について、他の宮都の造営記事と比較検討した結果、周到な構想や造営計画は無く、本格的な都城として位置付けられていたとは考えられないとする。また、大津京に関する文献資料を網羅して、内裏や朝堂院、漏刻台、楼閣、貴族の屋敷などの存在を指摘する。また、大津京の所在地に関しては、旧滋賀郡の大津と呼ばれる範疇の内にあり、崇福寺の東南方に当たるとする。

第2章では、大津京の研究史を、第1期（江戸時代後期～明治時代前半）、第2期（明治34年～大正末年）、第3期（昭和初期～昭和40年代）、第4期（昭和40年代後半以後）の4時期に区分してまとめる。特に、大津宮の所在地の手がかりとなる崇福寺跡、梵釈寺跡については、福山敏男の、滋賀里西方山中の北尾根・中尾根の遺構を崇福寺に、南尾根の遺構を梵釈寺に比定する見解を評価する。

第3章では、推定大津京城における発掘調査の

成果を網羅する。大津宮の位置については、従来、穴太・滋賀里・南滋賀などに比定する説があったが、昭和49年(1974)に、大津市錦織2丁目宇御所ノ内で、大津宮の建物跡と見られる遺構が初めて検出され、その後も大型の建物や溝などが錦織地区で集中的に見つかったことや、当時の海岸線や地形の復原からも、錦織に大津宮があったとする。

第4章では、発掘調査の成果を踏まえて、大津宮の復原を行う。まず、錦織の微地形を観察し、扇状地の中央やや西寄りを、南北に通る直線的な道路や、道路西側の人為的な段の存在に注目する。そして、錦織第1地点の門(SB001)と、そこから東に延びる回廊(SC001)に直角に取り付き北に延びる塀(SA001)、および第7地点における調査結果、第6地点の廂付き建物(SB015)などから、大津宮の中軸線を、ほぼ先に述べた南北道路付近に求める。また、道路西側の段差については、その下縁に沿って、回廊や大垣の存在を想定し、これを中軸線で折り返した所にも、同様に回廊や大垣が存在したとする。そして、東西7間と見られる門(SB001)を、内裏南門に比定し、そこから北側を内裏、南側を朝堂院とする。さらに、東西7間と見られるSB015を内裏正殿に、SB019を内裏の奥向きの中心的建物に比定し、SB006を朝堂院西第1堂と仮定する。

第5章では、まず、錦織の遺構群と同一方位を示す遺構が、南滋賀や穴太においても確認され、南滋賀廃寺や穴太廃寺の伽藍造営計画の分析と合わせて、大津京城に、統一的な一定の都市計画が存在したとする。しかし、起伏に富んだ地勢や、発掘の成果から、基盤目状の整然とした条坊ないし地割は無かったとする見通しを述べる。そして、南滋賀廃寺付近に存在する方格地割について、条里地割に先行する「特殊区画」として注目する。

次に、大津北郊に、大津京との併行期である7世紀後半代に存在した、穴太廃寺、崇福寺跡、南滋賀廃寺、園城寺前身寺院の遺構について述べる。この内、崇福寺跡を除く3寺院は、近江遷都以前に、渡来系集団の氏寺として建立されたもの

が、大津京建設に際して官寺として取り込まれたと考えられ、その際、官主導で新たに作られた復弁蓮華文系のA系統の瓦と、従前の氏寺に用いられていた単弁系のB系統の瓦の両方が使用されたとする。一方、B系統の瓦を用いない崇福寺は、山林修行の場として、遷都に伴い、新たに造営されたと見なす。

また、大津北郊に分布する「切妻大壁造り住居」について、それと類似した遺構が、近年、韓国でも検出されていることなどから、6世紀末から7世紀初頭ごろに、渡来系集団の移住にともなう、もたらされたものとする。同様に、穴太遺跡で出土したオンドルについても、韓国や中国の遺構を紹介しながら、渡来系集落内に、故地の風習が再現されたものと見る。

第6章は、これまで述べてきたことの、まとめと今後の展望であるが、特に大津京西方の比叡山中に、朝鮮式山城が存在した可能性を強調する。そして、なぜ近江の地に都が置かれたかについては、高句麗との通交や、難波津から隔たって、東国や北陸からの物資兵力の補給に利便の地であることなどを挙げ、また、遷都を受け入れて、強力な支援を惜しまなかったと推測される大津北郊の渡来系集団の存在に注目する。

付章では、南滋賀廃寺およびその瓦窯である榎木原遺跡出土のA系統の復弁八葉蓮華文軒丸瓦の製作技法である、いわゆる一本造り技法について検討し、この技法は、南滋賀廃寺と園城寺前身寺院の瓦工たちによって用いられ、高句麗の瓦製作技法の系譜を引く可能性があるとする。また、この瓦に類似した瓦を用いる大和の川原寺の創建が、近江遷都以前であるとする通説に対して、南滋賀廃寺式軒丸瓦が川原寺のそれより先行すると見て、川原寺の建立は、近江遷都後の唐の脅威の去ったのち以降と推測する。

以上、本書の内容を要約してきたが、専門的な内容であると同時に、基本的なレベルから丁寧な説明がされており、考古学には門外漢の評者にとっても、わかりやすい内容であった。また、地理的な背景にも充分目を配られており、図版を多用されるなど、歴史地理学の研究者の興味をそそる部分が多い。ここで評者の関心に引きつけて言えば、全国的な古代駅路の敷設は、近江朝に積極的に行われているようなので、大津京から、ど

のように駅路が発していたかについても、興味を持たれる。

なお、著者も述べているように、大津京に関する遺構は、他の宮都に比べてもまだ少なく、著者による宮城の復原も、仮説の域に基づく所が多い。これは、特に宮城付近が人家の密集地帯で、広い面積を発掘することが困難であることに拠る。しかし、そのような悪条件の中で、地道な調査を重ねている著者の御努力に敬意を表し、本書の刊行が大きな契機となって、今後、大津京の研究が飛躍的發展を遂げることを期待するものである。

(木本雅康)

## 大場俊雄著：『あわび文化と日本人』

成山堂書店 2000年4月

四六判 176頁 1,680円

本書は、千葉県水産試験場でアワビの増殖に長年取り組んで来られた大場俊雄氏が、これまでに蓄積された文献や聞き取り調査データを基に、アワビが日本人に関わってきた文化・歴史についてまとめたもので、『房総の潜水器漁業史』(崙書房、1993年)や『房総アワビ漁業の変遷と漁業法』(崙書房、1995年)等の成果を受けて執筆された、アワビに関するライフワーク的研究の中の一冊で、日本水産学会の監修となっている。

その構成は、以下の通りである。

### 第1章 アワビとはどんな貝

- 1-1 耳形に巻く殻
- 1-2 アワビは世界の海に
- 1-3 アワビの生活ぶり
- 1-4 アワビはなぜ高い

### 第2章 アワビを食べる食文化

- 2-1 料理の多彩さ
- 2-2 アワビステーキ誕生
- 2-3 アワビ缶詰
- 2-4 干しあわび

### 第3章 あわび日本人史

- 3-1 アワビ漁業史
- 3-2 薬としてのアワビを著した書

### 第4章 生活に溶け込んだアワビ

- 4-1 のしあわび
- 4-2 殻も活用
- 4-3 安産祈願と魔よけ